

書評

現代欧米急進右翼の思想的源流と発展を調べて

—「虎に乗ろう」から「虎を絞め殺せ」へ—

Exploring the Ideological Origins and Developments of the Radical Right in Contemporary
Western Countries : From "Ride the Tiger" to "Strangle the Tiger"

譚天

目次:

はじめに

一. 本書の構成

二. 本書の概要

(一.一) 共通点

(一.二) 相違点

(一.三) 特筆すべき点

(一.四) 戦後の急進右翼とのつながり

三. 本書の意義

(三.一) 急進右翼研究における思想史的考察の重要性

(三・二) 急進右翼思想家の「戦略転換」への鋭敏な洞察

(三・三) 中立性と客観性を確保する貴重な学問的姿勢

四・急進右翼思想の全体像の把握困難と今後の課題

終わりに

Sedgwick, Mark. (ed.). (2019). *Key Thinkers of the Radical Right: Behind the New Threat to Liberal Democracy*. New York: Oxford University Press.

はじめに

近年、欧米先進諸国の民主政治で起こった最も重要な変化の一つは、「急進右翼」(Radical Right)勢力の急速な台頭であろう。とりわけ、二〇一〇年代に入ってから、急進右翼政党の主流化／与党化はヨーロッパにおいて多く見られる現象となり、「ティーパーティー」(Tea Party)に代表される保守派のポピュリスト運動、ソーシヤル・メディアを介して伝播・拡散される「オルタナ右翼」(Alt-Right)運動はアメリカを席巻し、二〇一六年のアメリカ合衆国大統領選挙におけるドナルド・トランプの「歴史的」な勝利の原動力となった。これらの一連の政治的大変動を背景として、政治学の分野では急進右翼／ポピュリズム研究が爆発的に増加した。

現在、欧米の自由民主主義を揺るがしている急進右翼運動には、他の政治・社会運動と同様に、その出現と発展

を根底から支えてきた思想的源泉が存在する¹⁾。Sedgwick, Mark. (ed.). (2019). *Key Thinkers of the Radical Right: Behind the New Threat to Liberal Democracy*. New York: Oxford University Press. 15#

なごこの問題意識をもち、戦後の欧米諸国における急進右翼運動の展開に理論的基礎をインスピレーションを提供してきた思想家らの生い立ち、思想および影響を紹介する意欲作である。そして、管見の限り、本書は思想の面から網羅的に急進右翼運動を解剖しようとする最初の試み²⁾ともなる。

1. 本書の構成

本書は三つの部分に分かれ、延々一六の章によって構成される。

第一部では「古典的な思想家」(Classic Thinker)としてオスヴァルト・シュペンジャー (Oswald Spengler) / エルンスト・ユンガー (Ernst Jünger) / カール・シュミット (Carl Schmitt) / ヴェリヴル・ユルカ (Julius Evola) が紹介される。

第二部では「マラン・ド・ベノイスト」(Alain de Benoist) / ギョーム・ノット (Guillaume Faye) / キーン・トリアノフリード (Paul Gottfried) / パトリック・ブッハナン (Patrick J. Buchanan) / ジャレッド・テイラー (Jared Taylor) / アレクサンデル・デュギン (Aleksandr Dugin) / バット・ヤェル (Bat Ye'or) / ユーゴ・バトの「現代の思想家」(Modern Thinker) が分析される。

最後、第三部の考察対象は「新興の思想家」(Emergent Thinker) のメンシウス・モールメンツ (Mencius Moldbug) / グレグ・ジョンソン (Greg Johnson) / リチャード・スペンサー (Richard B. Spencer) / シャン

ク・ドノヴァン (Jack Donovan) ならびにダニエル・フリーベリ (Daniel Friberg) の五人である。

上記の一人は、戦後の欧米諸国における急進右翼運動の発展に関連して、国境と世代を越える幅広い読者を獲得した重要な思想家である。これに対して、特定の国や時代に限定的な影響しか与えなかった思想家、またはフリードリヒ・ニーチェ (Friedrich Nietzsche) やマルティン・ハイデッガー (Martin Heidegger) のように、影響の範囲が余りにも大きすぎて、急進右翼思想家に位置づけることができない思想家は本書の考察の対象外である。

二．本書の概要

【表1】～【表4】は一人の急進右翼思想家それぞれの基本的な個人情報、主要作品、中核的な思想および政治的志向と地位を示したものである。これらの表から明らかのように、各人の中核的な思想は非常に多様で複雑であるが、以下ではこれらの思想の中に潜んでいる同異を概括してみよう。

(二．一) 共通点

シュペンゲラーの「西洋文明の没落」やフランス新右翼の「欧州文明の衰退」論、アメリカ急進右翼の言う「白人アイデンティティの喪失」やイエールのような極端な反イスラム主義者が危惧する「ユダヤキリスト教徒の庇護民化」などに示されるような、ある種の「終末論」(Apocalypticism) または「文化的悲観主義」が、急進右翼思想家らが持つ重要な共通点の一つである。

表1 古典的な思想家

国籍	生没	主要作品	思想的な思想	政治的主張と地位
オズワルト・シュペンガー (Oswald Spengler)	1880.05.29 - 1936.05.08	『西洋の没落』 (Der Untergang Des Abendlandes)	1.西洋文明の没落の不可避性、運命史観 2.文明論の中期と後期の中期性 3.4種の歴史意識	1.イデオロギズムに反対 2.国民社会主義を批判
エーリヒ・ユンガー (Ernst Junger)	1895.03.28 - 1998.02.17	『戦後の罫の中』 (In Stahlgewittern)	1.戦争責任主義 2.自由主義的時代の終結、欧州文明の衰退、反近代主義 3.ユース・モラル(ユート)を批判 4.人権論が成り立たない限り戦争で権威主義的なナチオナリズム 5.政治的暴力の「青い」結果と統合 6.歴史主義	1.『保守革命』(Konservative Revolution)の代表的な人物 2.国民社会主義を支持、ナチスに反対
カール・シュミット (Carl Schmitt)	1888.07.11 - 1985.04.07	1.『政治神学』 (Politische Theologie) 2.『政治的理論の概念』 (Der Begriff Des Politischen) 3.『憲法論』 (Verfassungslehre)	1.『憲-神学論』 2.『例外状態』(Ausnahmezustand) 3.自由主義的価値観を批判し、国民投票による非自由主義的決定を支持 4.反平等主義 5.ナチオナリズム 6.反ユダヤ主義 7.反普遍主義 8.国家主義を支持	1.『保守革命』の代表的な人物 2.国民社会主義に思想的な支持を 提供、権威的なナチス賛美
ユウス・エヴォラ (Julius Evola)	1898.06.19 - 1974.06.11	1.『近代社会への反応』 (Revolta Contro Il Mondo Moderno) 2.『戦後の罫の中』 (Gli Uomini E Le Rovine) 3.『幽霊と魔術』 (Covincere La Tige)	1.『近代社会への反応』 2.『戦後の罫の中』 3.『幽霊と魔術』 4.『保守神学』(Conservative Monarchism)国家の神話 5.『精神の人類学』 6.『近代精神を表現するユダヤ主義』に反対 7.『政治神学』(Politica)の重要性 8.『政治神学』(Politica)の重要性	1.『精神性』(Spirituality)を欠いている 2.『ユダヤ主義』(Judaism)と 『エヴォラ』(Evola)に反対 3.『ユダヤ主義』(Judaism)と 『エヴォラ』(Evola)に反対 4.『ユダヤ主義』(Judaism)と 『エヴォラ』(Evola)に反対 5.『ユダヤ主義』(Judaism)と 『エヴォラ』(Evola)に反対 6.『ユダヤ主義』(Judaism)と 『エヴォラ』(Evola)に反対

表2 現代の思想家(1)

国籍	生没	主要作品	思想的な思想	政治的主張と地位
アラント・ブノア (Alain de Benoist)	1943.12.11 - 現在	1.『右側から見て』 (Vu De Droite) 2.『政治的理論の再発見』 (Mouvements Pour Une Renaissance Europeenne) 3.『人権を越えて』 (Au-delà Des Droits De L'homme)	1.自由市場経済、グローバル化、反平等主義、 反ブルジョア、反成長(Décroissance) 2.成長主義 3.人権の普遍性に反対、反平等主義 4.ナチス教の(精神性)の適度に反対、異教主義 5.『政治的理論』(Politique)の重要性を主張 6.『異教主義』(Polytheisme) 7.『保守神学』(Conservative Monarchism)に賛成、ユートに反対 8.『保守神学』(Conservative Monarchism)に賛成、ユートに反対 9.『保守神学』(Conservative Monarchism)に賛成、ユートに反対 10.『保守神学』(Conservative Monarchism)に賛成、ユートに反対 11.『保守神学』(Conservative Monarchism)に賛成、ユートに反対 12.『保守神学』(Conservative Monarchism)に賛成、ユートに反対	1.『保守革命』の継承者 2.『保守革命』(Conservative Revolution)の代表的な人物 3.『保守革命』(Conservative Revolution)の代表的な人物 4.『保守革命』(Conservative Revolution)の代表的な人物
ギユーム・フワエ (Guillaume Faye)	1949.11.07 - 2019.03.07	1.『古い未来主義』 (L'Archéofuturisme) 2.『政治的理論』 (La Colonisation De L'Europe) 3.『指をばね撃つ』 (Pourquoi Nous Combattre)	1.『古い未来主義』(L'Archéofuturisme)に賛成、ユートに反対 2.『政治的理論』(Politique)の重要性を主張 3.『政治的理論』(Politique)の重要性を主張 4.『政治的理論』(Politique)の重要性を主張 5.『政治的理論』(Politique)の重要性を主張 6.『政治的理論』(Politique)の重要性を主張 7.『政治的理論』(Politique)の重要性を主張 8.『政治的理論』(Politique)の重要性を主張 9.『政治的理論』(Politique)の重要性を主張 10.『政治的理論』(Politique)の重要性を主張 11.『政治的理論』(Politique)の重要性を主張 12.『政治的理論』(Politique)の重要性を主張	1.『保守革命』(Conservative Revolution)の代表的な人物 2.『保守革命』(Conservative Revolution)の代表的な人物
ポール・ゴットフリート (Paul Gottfried)	1941.11.21 - 現在	1.『歴史的神話の探求』 (The Search For Historical Meaning) 2.『保守主義運動』 (The Conservative Movement) 3.『政治的理論』 (After Liberalism) 4.『多文化主義と神の政治』 (Multiculturalism And The Politics Of Gods) 5.『マルクス主義の呪詛』 (The Strange Death Of Marxism)	1.『保守主義運動』(Conservative Movement)の重要性を主張 2.『保守主義運動』(Conservative Movement)の重要性を主張 3.『保守主義運動』(Conservative Movement)の重要性を主張 4.『保守主義運動』(Conservative Movement)の重要性を主張 5.『保守主義運動』(Conservative Movement)の重要性を主張 6.『保守主義運動』(Conservative Movement)の重要性を主張 7.『保守主義運動』(Conservative Movement)の重要性を主張 8.『保守主義運動』(Conservative Movement)の重要性を主張 9.『保守主義運動』(Conservative Movement)の重要性を主張 10.『保守主義運動』(Conservative Movement)の重要性を主張 11.『保守主義運動』(Conservative Movement)の重要性を主張 12.『保守主義運動』(Conservative Movement)の重要性を主張	1.『保守主義運動』(Conservative Movement)の代表的な人物 2.『保守主義運動』(Conservative Movement)の代表的な人物

表3 現代の思想家(2)

国籍	生没	主要作品	思想的な思想	経済的主張と地位
パトリック・ブキャナン (Patrick J. Buchanan)	米 1938.11.02 - 現在	『西洋の死』 (The Death Of The West)	1. 道徳存主義 2. 西洋文明の衰退 3. 民族主義、カリスマ 4. 白人ナショナリズム 5. 移民排斥主義 6. 『管理階級』(Managerial Class)、グローバリ-エリート層を批判 7. 反ユダヤ主義	アメリカ保守主義の代表的な人物 保守思想家
ジェレッド・テイラー (Jared Taylor)	米 1961.09.15 - 現在	1. 『暁日の影』 (Shadows Of The Rising Sun) 2. 『尊厳の謀略』 (Paved With Good Intentions) 3. 『白人アイデンティティ』 (White Identity)	1. 白人ナショナリズム、白人アイデンティティ 2. 国家の安否によっての人種的・言語的・文化的相異性の重要性を強調、反多文化主義、移民排斥主義 3. 人種差別への道徳的批判 4. 伝統的な価値観 5. 白人至上主義の正当性の再評価	アメリカにおけるアイデンティティ・タクティクス運動の代表的な人物 アメリカ保守主義の思想家 白人至上主義の代表者 白人至上主義の再評価
アレクサンデル・ドゥーガン (Alexander Dugin)	露 1962.01.07 - 現在	1. 『東洋の福音』 (Ornery Gospelnik) 2. 『東洋の政治理論』 (Christevan Political Theory)	1. 『東洋の福音』 2. 『東洋の政治理論』 3. 『東洋の政治理論』 4. 反ユダヤ主義、反ユダヤ主義 5. 伝統主義 6. 東洋の再評価 7. 文化の重要性を強調 8. 東洋の再評価 9. 白人ナショナリズム	ロシアにおける最も代表的な東洋右翼思想家
ハリエール (Bat Ye'or)	エジプト/英 1933 - 現在	1. 『東方福音の衰退』 (The Decline Of Eastern Christianity) 2. 『ユダヤ』 (Judaism) 3. 『文化、グローバリゼーションと世界イスラームの到来』 (Europe, Globalization And The Coming Of The Universal Caliphate)	1. 反イスラーム論 2. 『ユダヤ』(Judaism)の批判 3. 『ユダヤ』(Judaism)の批判 4. 自由主義的批判 5. 自由主義的批判	中東の反イスラーム主義運動の主要なイデオロギー

表4 新興の思想家

国籍	生没	主要作品	思想的な思想	経済的主張と地位
メンシウス・メルドバグ (Mencius Moldbug)	米 1973.06.26 - 現在	ウェブサイ-『Unqualified Reservations』	1. 『ネオ-反動主義』(Neo-Reactionism)＝極端なリバタリアン 2. 権威主義と道徳的結合を主張、民主主義を批判 3. リバタリアン権威主義 4. 経済的自由放任と完全な私有化 5. 道徳的批判を強調 6. 反ユダヤ主義、反平等主義 7. 道徳主義、立憲主義とリベリズムを批判 8. オルタク主義、アイデンティティ論 9. 『ネオ-反動主義』	1. インターネットを基盤とするネオ-反動主義運動の創始者 2. アメリカの保守主義の思想家 3. 道徳主義、人種主義の思想家 4. 『ネオ-反動主義』(Neo-Reactionism)を基盤とした政治的運動を推進
グレッグ・ジョンソン (Greg Johnson)	米 1963.07.13 - 現在	1. 『北米新右翼』 (North American New Right) 2. 『新右翼 vs. 旧右翼』 (New Right vs. Old Right) 3. 『道徳を守るために』 (In Defense Of Virtue)	1. 道徳主義的な保守を批判、伝統主義 2. 文化の重要性を強調 3. 移民排斥主義、移民排斥主義 4. 白人ナショナリズム 5. 反ユダヤ主義 6. 反平等主義 7. 道徳主義 8. 道徳主義 9. 道徳主義運動、移民排斥主義 10. 白人ナショナリズム 11. 人種主義	1. 『北米新右翼』(North American New Right)の創始者 2. 道徳主義、人種主義の思想家 3. 『道徳を守るために』(In Defense Of Virtue)の著者 4. 『道徳を守るために』(In Defense Of Virtue)の著者
リチャード・スペンサー (Richard B. Spencer)	米 1978.06.11 - 現在	1. 『何が本当の右翼か』(The Upgrading Of European Ideology) 2. 『何が本当の右翼か』(What It Means To Be Alt-Right)	1. 文化の重要性を強調 2. 自由主義 3. 道徳主義 4. 道徳主義 5. 道徳主義 6. 道徳主義 7. 道徳主義 8. 道徳主義 9. 道徳主義	1. オルタク主義の代表的な人物、その発行機関の人 2. 『道徳を守るために』(National Policy Institute)の所長
ジャック・ドナン (Jack Donaghy)	米 1974.10.23 - 現在	1. 『男性の道』 (The Way Of Men) 2. 『野蛮人になる』 (Becoming A Barbarian)	1. 『男性の道』 2. 『野蛮人になる』 3. 『野蛮人になる』 4. 反平等主義、反平等主義 5. 反多文化主義 6. 道徳主義	男性解放主義の父
ダニエル・フーベリ (Daniel Friberg)	現南 1978 - 現在	『真正右翼の復讐』 (The Real Right Return)	1. 文化の重要性を強調 2. 白人ナショナリズム 3. 道徳主義、反多文化主義、移民排斥主義 4. 道徳主義 5. 道徳主義 6. 道徳主義	1. 世界中で最も有名な東洋右翼思想家 2. 『真正右翼の復讐』(The Real Right Return)の著者 3. 『真正右翼の復讐』(The Real Right Return)の著者 4. 『真正右翼の復讐』(The Real Right Return)の著者 5. 『真正右翼の復讐』(The Real Right Return)の著者 6. 『真正右翼の復讐』(The Real Right Return)の著者

フランスを代表する新右翼思想家のブノワが提唱した「民族的多元主義」(Ethnopluralism)とファユの「民族領域／エスノスフィア」(Ethnosphere)論は、こうした悲観主義の文脈に沿うものである。彼らは、外来文化からの「侵略」による自らの文化やアイデンティティのさらなる「崩壊」を阻止するために、各民族は平等でありながら、それぞれの固有の民族領域／エスノスフィアに閉じ込めて互いに分かれている状態が望ましいと主張した。このように人種差別の色を薄めた新しい異民族隔離主義が戦後欧米諸国の急進右翼思想に大きな共鳴を引き起こし、「移民排斥主義」(Nativism)と反多文化主義を蔓延させることになった。

それと同時に、現代の多文化的な社会の形成に加担したとして、コスモポリタンの・自由主義的・進歩的なエリートは批判的とされる。例えば、モールドバグは進歩的なエリート集団を「大聖堂」(Cathedral)に喩え、彼らが追求してきた「普遍的価値観」はこの「大聖堂」の統治を固めるための道具に過ぎず、一般人の思想を束縛する桎梏であると主張する。こうして、急進右翼思想家らは伝統的な社会への回帰(伝統主義)を望むことに加え、近代主義、反進歩主義、反啓蒙主義、反平等主義、反普遍主義と反自由主義によって特徴づけられている。

これらの急進右翼思想家は政治体制に対する指向性においても共通の側面を有している。つまり、民族や文化が純粹な伝統社会を再構築するために、自国は自由民主主義を放棄して強力な権威主義体制に方向転換しなくてはならないということである。権威主義的ナショナリズム革命(ユンガー)、国民投票による非自由主義的な大統領制民主主義(シュミット)、精神的な君主制(エヴォラ)、民族ポルシェヴィズム(ドゥーギン)、リベタリアン権威主義(モールドバグ)、無政府ファシズム(ドノヴァン)などのような、自由民主主義に代わる様々な代替案が提案された。

最後に、急進右翼思想家らは、以上の目標を実現するために、「メタポリティクス／上位政治」(Metapolitics)

の領域でリーダーシップをとることの重要性を、ますます強く意識するようになっていく。これはイタリアのマルクス主義者アントニオ・グラムシ (Antonio Gramsci) の「文化的覇権」(Cultural Hegemony) 論から示唆を得たブノワ、ファユなどの初期のフランス新右翼思想家によって提唱されたことである。安定的で複雑な政治・社会・経済システムを構築・維持する上で不可欠なのは、このシステムを支えるある価値観や「世界観」(Weltanschauung) の普及化と支配的な地位が確保されていることである。それゆえ、歴史上に成功したすべての政治運動は例外なく、先んじてメタポリティクスの領域において優勢を占めてこそ功を奏したと信じている現在の急進右翼思想家らは、インターネット(ブログ、オンライン雑誌、掲示板)、出版物 (Artos 出版社、Counter-Currents 出版社)、ひいてはシンクタンク (GRECE、NPI) を通じて自らのメタポリティクス戦略を実践している。

(二・二) 相違点

本書では一六人の思想に多くの共通点が存在することが示唆されているが、いくつかの重要な急進右翼的主張をめぐっては実際、急進右翼思想家の間に合意がないか、時に観念に齟齬さえも生じる。

第一は、ナショナリズムに関して、シュミット、ユンガー、ブノワやファユなどの欧州の急進右翼思想家は自国のナショナリズムを訴えるわけではなく、欧州各国の「有機的」な統合を目指す、いわば「汎欧州ナショナリズム」(Pan-European Nationalism) を掲げるが、ブキャナン、テイラー、ジョンソン、スペンサーといったアメリカの急進右翼思想家は常に露骨な生物学的人種主義の性格を帯びる「白人ナショナリズム」(White Nationalism) を主張する。また、精神的な人種主義を賛美するエヴォラや、無政府主義を信奉するドノヴァンのような反ナショ

ナリズム的な思想家もいる。

第二は、反イスラム主義と反ユダヤ主義は急進右翼思想家の共通的な特徴ではない。前者に関して、例えば、ネオ・ユーラシア主義を唱えるドゥーギンはアメリカとイギリスに代表される「海洋国家」に対抗するためにムスリムはむしろ「自然な同盟相手」であると考えている。また、現代の最も急進的な急進右翼思想家と見なされるジョンソンさえもイスラム教を仮想敵と想定せず、逆にアメリカ白人に「白人アイデンティティー」を高めさせ、多文化社会の危険性を体感させる有益な道具として歓迎する。後者に関して、もともとユダヤ人であるイエオールはもとより、テイラーやドゥーギンなど、いわゆる「ユダヤ問題」に関心を寄せていない思想家も多い。

第三は、ファシズムやナチズムに対する共感の急進右翼思想家の潜在的な傾向であるとしれば指摘されているが、本書の考察から見れば必ずしもそうではない。まず、戦前あるいは戦時中に、積極的なナチ党員であるシュミットを除き、シュペンゲラー、ユンガーとエヴォラは共にファシズムをある程度肯定していたが、国民社会主義またはナチ党に対して、かえって批判的な立場を取っていた。そして、戦後には、フランス新右翼、特にブノワはイタリアのネオ・ファシズム運動に大きな影響を与えたが、彼の思想はファシズムやナチズムとかなり異なる性質を持っている。また、ドゥーギン、ジョンソン、ドノヴァンなど、ファシズムやナチズムへの親近感を公然と示した思想家もいれば、モールドバグのような、ファシズムを明確に拒絶した思想家もいる。

第四は、反資本主義、反自由市場経済、反グローバル化、「反成長」(Décroissance)のような、急進右翼思想家を分断する経済的次元もある。例えば、ブノワは急進的な反資本主義者として自由市場経済を激しく非難し、社会の生産と消費を縮小させるような環境志向の反成長的な政策を求める。これにより、ブノワはイタリアのコスタンツォ・プレレーヴェ(Costanzo Preve)やダニエロ・ゾロ(Danilo Zolo)など、同じ立場に立つマル

クス主義者と進歩主義者の著作まで積極的に翻訳・紹介した。こうしたマルクス主義・社会主義への「親和性」は、ブノワを他の急進右翼思想家から際立たせる重要な特徴の一つとなっている。ブノワの他に、ドゥーギン、スペンサーとドノヴァンも類似する経済的な価値観を有する。これとは対照的に、「小さな政府」を支持するゴットフリート、個人と民間団体の自由権の最大化を主張するテイラー、それに経済の自由放任と完全な民営化を唱えるモールドバグといった親自由市場的な急進右翼思想家も少なくない。

上述の四つの目立った相違点の外に、三つのやや微妙な相違点についても略述しよう。

まず、宗教的志向に関して、戦後欧州における急進右翼の強固な反キリスト教的傾向を裏付けるように、道教とヒンドゥー教から知恵を汲み取り、生涯にわたって「超越」の首位性を信じていたエヴォラを筆頭に、ブノワ、ファユ、そしてドノヴァンの思想の中には「異教主義」(Paganism)、神秘主義の色彩が極めて濃厚である。これは、キリスト教文明の終末に強烈な危機感を示したシュペンゲラー、カトリック教徒を自認するシュミット、欧州が抱える様々な問題を解決するためのキリスト教への信仰回帰の重要性を強調するユンガーといった古典的な思想家とも、あるいは伝統的なキリスト教の道徳と倫理を称揚するゴットフリートやブキャナンなどの現代アメリカの急進右翼思想家とも異なる。

続いて、欧州とアメリカの急進右翼思想家を引き離すもう一つの要素は、言うまでもなく、反米主義である。フランス新右翼によれば、現代欧州は自由主義、消費主義など、いわゆる「アメリカ的な価値観」による植民地化を経験しているのであり、アイデンティティーと主権を喪失した欧州大陸をアメリカの支配から解放することが急務である。こうした観点はドゥーギンのネオ・ユーラシア主義の理念形成にも多大な影響を与えた。

最後、急進右翼思想家は伝統的価値観を頑固に堅持すると当然のように目されるかもしれないが、実はそうでも

ない。なかでも、同性愛への賛否をめぐって急進右翼思想家は二分している。最も鮮明な例としては、男性至上主義的な「男性部族主義」(Male Tribalism)を首唱する同性愛者のドノヴァンであろう。彼にとっては男性同士の愛こそ、戦闘的な同志関係の具現化であり、理想とされる「男性ギャング」(Male Gang)の礎石である。また、極端なりパタリアン社会を志すモールドバグおよび「新しい道徳的ヒエラルキー」(New Moral Hierarchy)を作ろうとするジョンソンも同性愛を個人的自由という視点から容認し、ホモフォビアが遍在的なアメリカの急進右翼に「異彩」を添えたと言える。

(二・三) 特筆すべき点

上に整理された共通点と相違点から、欧米の急進右翼思想家は一枚岩ではないことがわかる。それに加えて、本書の内容については二つの特筆すべき点もあり、これから簡単に触れてみよう。

一つ目は、理想の政治と現実の政治の「収斂」という点である。ブノワは反エリート主義的な立場に基づいて現行の代表制民主主義を嫌悪するが、他方では「参加型民主主義」(Participatory Democracy)と「熟議型民主主義」(Deliberative Democracy)を推奨する。彼は、非自由主義的な大統領制民主主義を提唱するシュミットと似ていて、権威主義的な「行政国家」(Executive State)とポピュリズム的な大衆動員の結合する、いわば「非自由主義的民主主義」(Illiberal Democracy)の信者である。同様に、アメリカの「ネオ・反動主義」運動の中核的な主張、すなわちモールドバグが鼓吹する極端なりパタリアン社会と権威主義的な政治を組み合わせるという「リパタリアン権威主義」も、こうした非自由主義的民主主義の一つの変種であると考えられる。この特異な政治的主張は、ハンガリー、ポーランド、スロヴァキアなどの国にますます現実味を帯びつつあり、モールドバグの

言葉を借りて言えば、ピノチエト時代のチリ、「改革開放」初期の中国と現在のシンガポールはまさしく「好ましい未来」である。

二つ目は、反エリート主義に関連する点である。欧米の急進右翼思想家は常に反エリート主義と密接に結びついている。にもかかわらず、秩序、ヒエラルキー、権威、伝統、反平等主義、反普遍主義などは彼らの著作と思想の中のキーワードである。さらに、彼らが積極的に練り上げたメタポリティクス戦略も本質的には「エリートの」なものであることが窺われる。こうして、急進右翼思想家の反エリート主義を一種の「反エリート主義的なエリート主義」(Anti-Elitist Elitism)と理解しても良いだろう。言い換えれば、フランス革命時代の急進右翼と変わらぬ、二〇世紀以降の急進右翼の思想的基軸に据えられるのは、依然として階級、身分と権威を謳歌するエリート／貴族主義であり、彼らが絶えず表出しているポピュリズム的、反エリートの感情は往々にして、「非支配的エリート」⁵⁴ 実力派エリート」の対立軸を隠すための見せかけに過ぎない。とすれば、現在の欧米諸国を席巻しているポピュリズムの旋風に乗じて台頭してきた急進右翼政党を研究する際、それらの政党のイデオロギーの深層に潜伏している「反大衆的」な価値観を見落としてはいけないのである。

(二・四) 戦後の急進右翼政党とのつながり

さて、本書で取り上げられた一六人は急進右翼政党と一体、如何なる関係を持つのか。以下、この点について簡略に述べる。

現代と新興の急進右翼思想家とは異なり、古典的な思想家と戦後の急進右翼政党との実質的な交流を追跡することは難しい。戦前、戦時中にファシズム・ナチズム体制と緊密な関係を持っていたシュペンゲラー、ユンガーとシュ

ミットの作品は戦後も熱心な読者を得ているものの、彼らの思想をめぐる議論のほとんどは知識界に留まるものであり、またユンガーとシュミット自身も、戦後においては現実政治から意識的に距離を置いていた。

やや特殊なのはエヴォラである。ムッソリーニとヒトラーとの会談において通訳者を務めたことのあるエヴォラは早くも一九五一年にネオ・ファシズム系テロ組織の「知的扇動者」(Intellectual Instigator)として起訴され、最終的に無罪判決を受けたが、六〇年代後半に再び過激派学生団体の「知的指導者」と見られていた。殊に彼の著作、『虎に乗る』(Cavalcare La Tigra)の核心にある「没政治」(Apolitia)という概念は、非妥協的な街頭闘争の必要性を意味するものとして左右両翼の過激派学生に受け止められ、当時の街頭暴力を間接的に激化させた思想の一つであると思われる。学生運動の最盛期が過ぎ去った現在でも、エヴォラの思想と著作は、ギリシャの「黄金の夜明け」(Xροχόνη Αυγή)、ハンガリーの「ジョビク」(Jobbik)などの急進右翼政党の公式ウェブサイトで強く推薦されている。

現代の思想家について、青年時代に「秘密軍事組織」(Organisation Armée Secrète)、「民族主義学生連盟」(Fédération des Étudiants Nationalistes)などの右翼系準軍事組織、学生団体に参加したブノワは本来、知の領域におけるメタポリティクス戦略の実践に重心を置いてきたが、おおよそ一九七〇年代後半から目線を現実政治に移し始めた。その頃、イギリスのサッチャー政権(一九七九年〜一九九〇年)とアメリカのレーガン政権(一九八一年〜一九八九年)を皮切りに、ちょうど新保守主義、新自由主義の興起期であるため、そこから危機感を募らせたブノワは最初に自ら創設した「欧州文明研究会」(GRECE)を基盤としてフランスの中道右派政党、「共和国連合」(Rassemblement Pour la République)と「フランス民主連合」(Union pour la Démocratie Française)への働きかけを精力的に行っていたが、彼の反資本主義、反自由市場経済ひいては反キリスト教的な立場は到底、

主流右派に受容されなかった。それどころか、理念上の近接性があると推察される「国民戦線」(Front National)の場合でも、フランス新右翼と親しいブルノ・メグレ²⁾(Bruno Mégret)が副党首を担っていた一九八八年〜一九九八年の一〇年間を除き、ブノワの影響力は限定的である。とりわけ移民政策に関しては国民戦線が「同化政策」(Assimilation)を掲げるため、民族的多元主義の立場を取るブノワと相容れない。逆に、ブノワは国民戦線が「エリート vs. 大衆」という二元論的な対決の構図を重視しすぎているとし、これを「アイデンティティーの病理」(The Pathology of Identity)と見なして批判する。

それにもかかわらず、ブノワの思想は一九八〇年代から早々にイタリア、ドイツ、ベルギーに「輸出」され、マルコ・タルキ³⁾(Marco Tarchi)／ヘニング・アイヒベルグ⁴⁾(Henning Eichberg)などに伝播された結果、「イタリア社会運動」(Movimento Sociale Italiano)とその後継政党の「国民同盟」(Alleanza Nazionale)／「ドイツのための選択肢」(Alternative für Deutschland)といった急進右翼政党のみならず、イタリアの急進左翼政党からも多くの追随者を獲得した。

ブノワの他に、急進右翼政党と明確なつながりを持っている現代的思想家は、テイラー、ドゥーギンとイエオールであると思われる。

テイラーは欧州の急進右翼政党との関係を重視し、いわゆる「国際急進右翼運動」⁵⁾の熱心な推進者である。彼は自己所有のオンライン雑誌『American Renaissance』を通じてフランスの国民戦線、「イギリス独立党」(UK Independence Party)／「キーストリア自由党」(Breitliche Partei Österreichs)／ドイツのための選択肢ならびにベルギーの「フラームス・ベランタ」(Vlaams Belang)所属の活動家らに意見交流の舞台を提供している。引き換えに、テイラーもこれらの政党の講演会や党大会の常連客である。

「ナショナルボリスhevik Party」⁷⁾「ナーションズ」(Eurasia Party) など、いくつかの小さな急進右翼政党の創立者である。彼のネオ・ユーラシア主義という地政学的な思想は、「ロシア連邦共産党」(Communist Party of the Russian Federation) と「ロシア自由民主党」(Liberal Democratic Party of Russia) との左右両極の政党ばかりか、与党の「統一ロシア」(United Russia)⁸⁾ についてはロシア連邦軍の高級将校にまでも何らかの影響を及ぼしたと言われた。とは言え、ロシア国内とどうより、むしろ海外において彼の思想は真剣に受け入れられている。とりわけ彼はイタリア、フランス、ベルギー、ギリシャとハンガリーで巨大な支持者ネットワークを築き、かつて存在した「第三の位置」(The Third Position)⁹⁾ を提唱するフランスの「新しいレジスタンス」(Nouvelle Résistance)¹⁰⁾、ベルギーを拠点に置かれている民族ボリスhevikイズム政党たる「民族—欧州ボリスhevik党」(Parti Communistaire National-Européen) とした「非主流的」な小政党のみならず、イタリアの「北部同盟」(Lega Nord)¹¹⁾、ギリシャの黄金の夜明け、ハンガリーのショピクのような強い勢力を誇っている急進右翼政党のほか、ギリシャの「急進左派連合／シリザ」(SYRIZA) とやえ繋がっている。

国際的な反ジハード主義運動の中心的イデオログと見なされるイエオールと言えば、極右テロを想起するだろう。その中で最も有名なのは二〇一一年七月二日に起こったノルウェー連続テロ事件である。七十七人が殺害されたこの大惨事を起こしたアンネシュ・ブレイベク (Anders Breivik) によれば、イエオールの「ユーラピア」(Eurabia) 説が彼の反イスラム主義的思想の形成に重要な役割を果たしたという (Brown 2011)。テロリストだけでなく、イエオールの影響力は主流政治にも浸透したとされる。例えば、同じノルウェーにおいて、彼女の作品と思想は長い間、政府出資の NGO¹²⁾、しかも急進右翼政党の「進歩党」(Fremskritspartiet) と深く関わりの

ある「人権サービス」(Human Right Service)に押し広められていた。「人権サービス」による有権者の間の反イスラム感情の広まりは進歩党の選挙での支持拡大を後押しし、結局、二〇一三年以降に進歩党は主流化／与党化を成し遂げた。

最後に、新興の思想家として、中学生時代以来、「スウェーデン民主党」(Sverigedemokraterna)、「北欧レジスタンス運動」(Nordiska motståndsrörelsen)のために活動した経歴を持ち、拳銃犯罪で投獄されたこともあるスウェーデン人のフリーベリは、世界中で最も有名な急進右翼系出版社「Arktos」と急進右翼版の「Wikipedia」こと「Metapedia」の創設者であると同時に、メタポリティクス戦略を踏まえて北欧の急進右翼サブカルチャーを「刷新」した中心人物であると考えられる。また、彼が二〇〇七年に立ち上げた、ノルウェー、デンマークとスウェーデンの利用者を主とするネット掲示板「Nordisk」は、北欧における急進右翼向けの主要なオンラインハブであり、この掲示板で急進右翼政党の政治家の姿も頻繁に現れているという。さらに、二〇一七年一月に彼はスペインと一緒で「AlRight Corporation」を設立し、大西洋横断の白人アイデンティティ運動を始めた。こうして、国際的な影響力を振るっているフリーベリは、ハンガリーのヨッヒクの元党首ガーボル・ヴォナ(Gabor Vona)のような海外の重要な急進右翼政治家にまでも人脈を広げたのである。

三．本書の意義

(三．一) 急進右翼研究における思想的考察の重要性

第二次世界大戦の終結とそれに伴うファシズム、ナチズム体制の崩壊は、戦争・虐殺・圧迫に満ちたあの熱狂的

な時代にはもう永久に戻れないことを、当時欧州の多くの人に確信させたであろう。しかしながら、現在までのところ、ファシズム、ナチズムが「灰から飛び立つ不死鳥」ごとき誇張ではないにもかかわらず、イデオロギー的類似性のある急進右翼政党はまさか「普段着」を身にまとう形で我々の周りに存在し、しかもいよいよ勢いを増しつつある (Passmore 2014=2016: 143-167)。一九六〇年代に平均五・四%の得票と四%の議席から、二〇一〇年代に平均二二・四%の得票と二二・二%の議席へと成長した急進右翼政党 (Norris & Inglehart 2019: 9) (【図1】) は、急進左翼政党、緑の党など、戦後欧州における他の新興政党に比べれば特異な存在であり、「復活」(Resilience)、「躍進」(Breakthrough)、「定着」(Persistence) あるいは「主流化」(Mainstreaming) を経た現在、一部の国において「持続可能な執政能力」(Sustainability in Power) を獲得した様相すら呈しつつある (【表5】) (Akerman et al eds. 2016; 譚二〇一七、二〇一九、二〇二〇; 水島編二〇二〇)。こうした政党政治での趨勢変動を牽引しているのは、一九九〇年代以降の欧州社会 (なかでも東・南欧) の「右傾化」の加速 (【図2】 【表6】) である。実のところ、現時の欧州急進右翼政党の平均支持率は既に一九三〇年代の水準に達し、無党派層を除けば、唯一、絶え間なく拡大しているのは急進右翼的な有権者層である (Oxenham 2017)。

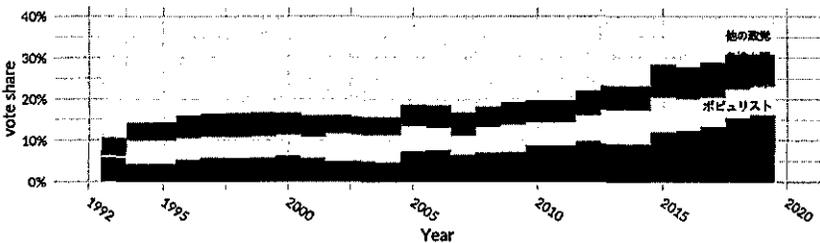


図1 1990年代以降の欧州における急進右翼政党の得票率の推移
出所：Rooduijn et al. (2019)。

表5 1990年代以降の西欧における与党化した急進右翼政党の一覧表

国	急進右翼政党	内閣	連立与党	期 間
オーストリア	自由党(FPÖ)	第1次シュツセル内閣	ÖVP, FPÖ	2000.02.04-2002.11.24
	自由党(FPÖ)	第2次シュツセル内閣	ÖVP, FPÖ	2002.11.24-2003.02.28
	自由党(FPÖ)	第3次シュツセル内閣	ÖVP, FPÖ	2003.02.28-2005.04.04
	自由党(FPÖ)	第1次クルン内閣	ÖVP, FPÖ	2017.12.18-2019.06.03
	未来同盟(BZÖ)	第4次シュツセル内閣	ÖVP, BZÖ	2005.04.05-2006.10.03
デンマーク	国民党(DF)	第1次A.F.ラスムセン内閣	V, KF, DF*	2001.11.27-2005.02.18
	国民党(DF)	第2次A.F.ラスムセン内閣	V, KF, DF*	2005.02.18-2007.11.23
	国民党(DF)	第3次A.F.ラスムセン内閣	V, KF, DF*	2007.11.23-2009.04.05
	国民党(DF)	第1次L.L.ラスムセン内閣	V, KF, DF*	2009.04.05-2011.10.03
	国民党(DF)	第2次L.L.ラスムセン内閣	V, KF, LA*, DF*	2015.06.28-2016.11.28
フィンランド	国民党(DF)	第3次L.L.ラスムセン内閣	V, KF, LA, DF*	2016.11.28-2019.06.27
	真のフィンランド人(PES)	第1次シピラ内閣	KESK, KOK, PS	2015.05.29-2017.06.12
イタリア	北部同盟(LN)	第1次ベルルスコーニ内閣	FI, AN, LN, CCD, UdCe	1994.05.10-1995.01.17
	北部同盟(LN)	第2次ベルルスコーニ内閣	FI, AN, LN, CCD+CDU	2001.06.11-2005.04.23
	北部同盟(LN)	第3次ベルルスコーニ内閣	FI, AN, LN, UDC, NPSI, PRI	2005.04.23-2006.05.17
	北部同盟(LN)	第4次ベルルスコーニ内閣	PdL, LN	2008.05.08-2011.11.12
	同盟(L)	コンテ内閣	M5S, LN	2018.06.01-2019.08.20
オランダ	ビム・フォルタイン党(LPF)	第1次バルクネンデ内閣	CDA, VVD, LPF	2002.07.22-2002.10.16
	ビム・フォルタイン党(LPF)	第2次バルクネンデ内閣	CDA, VVD, LPF	2002.10.16-2003.01.22
	自由党(PVV)	第1次ルッテ内閣	VVD, CDA, PVV*	2010.10.14-2012.04.23
ノルウェー	進歩党(FrP)	第1次ソルベルグ内閣	H, FrP, V*, KrF*	2013.10.16-2017.09.09
	進歩党(FrP)	第2次ソルベルグ内閣	H, FrP, V*, KrF*	2017.09.09-2018.01.17
	進歩党(FrP)	第3次ソルベルグ内閣	H, FrP, V, KrF*	2018.01.17-2019.01.22
	進歩党(FrP)	第4次ソルベルグ内閣	H, FrP, V, KrF	2019.01.22-2020.01.20
スイス	国民党(SVP)	—	FDP, SP, CVP, SVP	1990s-2007.12.12 2008.12.10-現在

注：*関外協力
出所：筆者作成

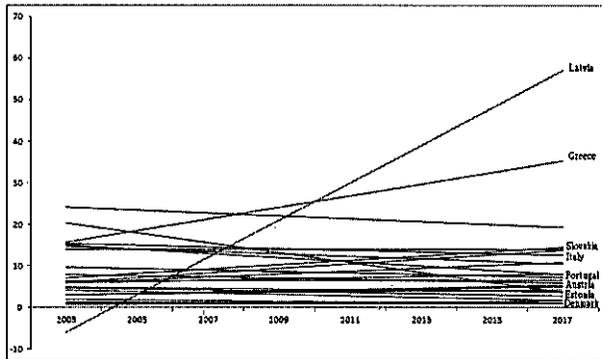


図2 欧州28カ国の「右翼過激主義の需要指数」(DEREK Index)の趨勢変動

出所：Demand for Right-Wing Extremism Index (DEREK Index) (Political Capital 2018)をもとに筆者作成。図中で表記された8カ国はそのDEREK指数が上向いている。

一方、上記の諸現象は決して社会的・経済的な構造変化による偶発的もしくは突発的なものではなく、先述の通り、すべての政治・社会運動と同じく急進右翼の勢力伸長の背後にも思想的な動力源があるため、本書は間違いなくこれら現実の政治動向を見守りつつ、こういう動力源の解明を試みたものである。

本書の冒頭で編者が言うように、この一六人の急進右翼思想家は、戦間期の保守革命者、戦時中のナチ党员、神秘主義者、フランス新右翼、旧保守主義者、アイデンティタリアン、ネオ・ユーラシア主義者、反イスラム主義者、極端なリベタリアン、オルタナ右翼、男性部族主義者という、多岐にわたる一群である。異なる時間的・空間的背景の下で彼らの思想の特徴と影響力には重大な相違点があることが明らかである。ただし、より重要視される必要なのは、それらの思想の根底に潜む連続性と共通点であり、他の諸思想・主義と一様に栄枯浮沈を経験した上で目下改めて活性化している、ということである。そういった共通点と相違点が、各章で簡潔明瞭かつ具体的に解説されたことは本書の評価されるべきところである。

(三・二) 急進右翼思想家の「戦略転換」への鋭敏な洞察

そして、本書のもう一つの意義は、急進右翼思想家の同異点への考察を通して彼らの「戦略転換」に注意喚起をしようとする点である。つまり、エヴォラに代表される古典的思想家は、「近代性」(Modernity)を凶暴な「虎」と比喻し、直接的な

表6 右翼テロ発生件数の推移⁽¹⁶⁾ (1990年～2018年)

時期	1990-1999	2000-2010	2011-2018
件数	196	244 (+24.5%)	317 (+29.9%)
急進右翼/極右 政党が関与した 件数	17	30 (+76.47%)	59 (+96.67%)
比率	8.67%	12.30% (+3.63%)	18.61% (+6.31%)

出所：Right-Wing Terrorism and Violence in Western Europe (the RTV dataset) (Ravndal 2016) をもとに筆者算出。

行動ではなく、「虎に乗」(Ride the Tiger) っただけでその「過労死」を待つしかないという、一種の消極的・受動的な戦略を採択していたことに對し、現代と新興の思想家は、フリーベリの言葉を借りるなら、虎の死を願う人々はむしろ「虎を絞め殺す」(Strangle the Tiger) 以外に選択の余地がない、という一種の積極的・主動的な戦略を採るようになりつつあることを、本書に鋭く指摘されたということである。

こうした急進右翼思想家の戦略転換を見る限りでは、ただ資本主義の崩壊の兆しを待つのか、それとも社会主義の到来までに日常闘争に積極的に参与するのか、という二〇世紀初頭における正統マルクス主義者と修正主義者間の路線対立 (Sassoon 2014: 5-26) が想起されるかもしれない。思想と学術の領域に囚われることに甘んじない現代と新興の急進右翼思想家は今やまさしく戦間期の修正派マルクス主義者の如く、現実の政治を能動的に改変しようとするため、出版物、シンクタンク、インターネットなど、多種多様な手段を通じてメタポリティクスの領域における急進右翼の覇権形成に心血を注いでいる。現代欧米政治の右傾化、ポピュリズムの隆盛との相関関係のいかんを問わず、彼らの活発な行動は必ず将来いつか「可視的」で「感知可能」な成果をあげるだろう、という本書からの警告は、断じて看過されてはならない。

(三・三) 中立性と客観性を確保する貴重な学問的姿勢

最後に、先入観を捨てて「等身大」の急進右翼思想家をなるべく的確に描写することも本書の突出した魅力である。例えば、内容の中立性と客観性を保つために執筆分担者が執筆の過程で未だに健在している対象人物との直接的な接触と意見交換に努めていた。すべての執筆分担者がフィードバックを得られたとは限らないが、少なくともこういう真摯な学問的姿勢は評価に値するだろう。このおかげで、読者が本書をもって急進右翼思想家らの生い立

ち、思想ならびに影響を冷静で正確に捉えることができることに加えて、本書の執筆分担者のタイトルバウムが説いたように、個人間のプライベートな付き合いにより、急進右翼に関する評論の「反射的な単音性」(Reflexively Monophonic Nature)が免れられて別様の視座も提示可能となる。

四・急進右翼思想の全体像の把握困難と今後の課題

国境と世代を越えて急進右翼の界限で重要な地位を占める思想家をほぼ網羅した点は本書の一大特色である。他方で、この一六人のみから、否応なく急進右翼思想の全体像を把握することは難しい。というのは、ニーチェ、ハイデッガーのような戦後の急進右翼運動に深遠な影響を及ぼした大物は本書の考察対象から外れている上に、誰が重要な思想家なのか、その重要性を判定する基準は何なのかは、本書で明確化されたとは言いがたいからである。

換言すれば、シャルル・モーラス⁽¹⁸⁾ (Charles Maurras) や、ジョルジュ・ソレル⁽¹⁹⁾ (Georges Sorel) (Berman 2006: 76-86; 山口 2014: 54-55) はもちろん、アルトゥール・メラー・ファン・デン・ブルック⁽²⁰⁾ (Arthur Moeller van den Bruck) 、アルミン・モラー⁽²¹⁾ (Armin Mohler) 、*やうに長らくの間*、その作品が欧米急進右翼に熱賛されている三島由紀夫など、急進右翼思想を論及する際に必ず避けられない重要人物らが排除されたのは、遺憾なことであると言わざるを得ない。

そして、新興の思想家のうち、フリーベリ以外の全員がアメリカ人であるため、本書の重心が若干偏っていると読者に受け止められる可能性も高い。とりわけアメリカの文脈では宗教(キリスト教)が非常に重要な地位を占めている一方、欧州に比してアメリカ急進右翼における生物学的人種主義と「女性嫌悪」(Misogyny)の猛烈さも

目立っている。これらのいわば「アメリカの特色ある要素」が大西洋兩岸の急進右翼を確実に分断していることを読者があらかじめ心がけておくべきである。

総じて言えば、急進右翼という言葉を聞くと、移民排斥、人種差別、不寛容、反多元主義、権威主義、ポピュリズムなど、種々の負のイメージが即座に普通の人々の頭に浮かんでくることは一般的かもしれないが、事実、本書の内容から読み取れるのは、世間がステレオタイプを超えて急進右翼を見極める必要性と、急進右翼研究が「一枚岩的な視点」(Monolithic Perspective)を揚棄し、バランスを取りながら急進右翼とその思想の全体像を最大限に掘む重要性である。これは本書の試みではあるが、今後の課題でもある。

終わりに

二〇一九年一〇月二七日に行われたテューリンゲン (Thuringen) 州議会選挙では「左翼党」(Die Linke)が史上初めて州レベルで第一党となり、第二党のドイツのための選択党と共に主流政党を押しつけ、いわゆる「消極的多数派」(Negative Majority)を形成したことにより、この「ドイツの緑の心臓」(Das Grüne Herz Deutschlands)とも称される州はスポットライトを浴びていた。それに翌年二月、当初予想された左翼党のボド・ラメロウ (Bodo Ramelow) が率いる少数派政権の樹立とは裏腹に、ドイツのための選択党から支持を受けた「自由民主党」(Freie Demokratische Partei) のトマス・ケメリヒ (Thomas Kemmerich) が一票の差で州首相に選出され、世論の猛反発を招いた。結局、高まっている憤怒の声の中、ケメリヒが州首相就任の翌日に退陣を余儀なくされた。

にもかかわらず、過去の「真の遺産」に強く影響され、最も強固な「防疫線」(Cordon Sanitaire)が構築されているドイツをさえ、主流政党と急進右翼政党との「暗黙の協力」がより得ることから、こういった防疫線の持続的な弱体化と、最終的に崩壊する危険性のあることが垣間見えて戦後七十五年の今日に警鐘を鳴らしている。これを受けて、急進右翼政党をより全面的で体系的に研究することは政治学分野における喫緊の課題となり、その中で急進右翼思想への討究も欠かせないものである。

参考文献

- Akerman, T., de Lange, S. L. & Rooduijn, M. (eds.). (2016). *Radical Right-Wing Populist Parties in Western Europe: Into the Mainstream?*. Routledge.
- Berman, S. (2006). *The Primacy of Politics: Social Democracy and the Making of Europe's Twentieth Century*. Cambridge University Press.
- Brown, A.F. (2011). "Anders Breivik's Spider Web of Hate." *Guardian*, <https://www.theguardian.com/commentisfree/2011/sep/07/anders-breivik-hate-manifesto>. (2020.07.01閲覧)
- Caiani, M. (2018). "Radical Right Cross-National Links and International Cooperation." in Rydgeren, J. (ed.). *The Oxford Handbook of The Radical Right*. Oxford University Press, 561-585.
- Gallagher, T. (2000). "Exit from the ghetto: the Italian far right in the 1990s." in Hainsworth, P. (ed.). *The Politics of the Extreme Right: From the Margins to the Mainstream*. Pinter, 64-86.
- Gibson, M. (2016). *Responses to Modernity: the Political Thought of Five Right-Wing European Thinkers in the Twentieth and Twenty-First Centuries*. Doctoral Dissertation, The George Washington University.

- Kreko, P. (2014). The Russian Connection: The Spread of Pro-Russian Policies on the European Far Right. *Working Paper*, Political Capital Institute.
- March, L. (2016). "Radical Left 'Success' before and after the Great Recession: Still Waiting for the Great Leap Forward?" in March, L. & Keith, D. (eds.). *Europe's Radical Left: From Marginality to the Mainstream?* Rowman & Littlefield International, Ltd, 27-50.
- Mayer, N. (2018). "The Radical Right in France." in Rydgeren, J. (ed.). *The Oxford Handbook of The Radical Right*. Oxford University Press, 614-640.
- McDonnell, D. & Werner, A. (2019). *International Populism: The Radical Right in the European Parliament*. Hurst Publishers.
- Mudde, C. (2019). *The Far Right Today*. Polity.
- Norris, P. & Inglehart, R. (2019). *Cultural Backlash: Trump, Brexit, and Authoritarian Populism*. Cambridge University Press.
- Oxenham, S. (2017). "The rise of political apathy in two charts." *Nature*, <https://www.nature.com/news/the-rise-of-political-apaty-in-two-charts-1.22106>. (2020.05.22閲覧)
- Passmore, K. (2014). *Fascism: A Very Short Introduction (Second Edition)*. Oxford University Press. (櫻井 誠 監訳 (1) OLC) 『ファシズムの歴史』 非終端監訳
- Political Capital. (2018). *Demand for Right-Wing Extremism (DEREX Index)*. <http://derexindex.eu/>. (2020.05.14閲覧)
- Ravndal, J. A. (2016). "Right-wing terrorism and violence in Western Europe: Introducing the RTV dataset." *Perspectives on Terrorism*, 10(3), 2-15.
- Rooduijn, M., Van Kessel, S., Froio, C., Pirro, A., De Lange, S., Halikiopoulou, D., Lewis, P., Mudde, C. & Taggart, P. (2019). *The Populist: An Overview of Populist, Far Right, Far Left and Eurosceptic Parties in Europe*.

- <https://popu-list.org/>. (2020.05.14閲覧)
- Sassoon, D. (2014). *One Hundred Years of Socialism: The West European Left in the Twentieth Century*. I.B. Tauris.
- Spoon, J.-J. (2015). *Political Survival of Small Parties in Europe (New Comparative Politics)*. University of Michigan Press.
- Tietelbaum, B. (2017). *Lions of the North: Sounds of the New Nordic Radical Nationalism*. Oxford University Press.
- Umland, A. (2017). Post-Soviet Neo-Eurasianism, the Putin System, and the Contemporary European Extreme Right. *Perspectives on Politics*, 15(2), 465-476.
- Weiß, V. (2017). *Die autoritäre Revolte: Die Neue Rechte und der Untergang des Abendlandes*. Klett-Cotta Verlag.
- Ye'Or, B. (2005). *Eurabia: The Euro-Arab Axis*. Fairleigh Dickinson University Press.
- (長谷川晴生訳 (2019) 『ケインの新右翼』新泉社。)
- 古賀光生 (2013) 「戦略・組織・動員 (1) — 右翼ポピュリスト政党の政策転換と克組織」『国家学会雑誌』二二六 (七・八)、六三五—六八七頁。
- 譚天 (2017) 「西欧における急進右翼ポピュリスト政党と左派政党の競争関係に関する一考察—一九八〇年代中葉以降の塊、独及び伊を中心に」『法学』八一 (四)、五一—五八三頁。
- 譚天 (2019) 「選挙勢力から政権勢力へ—西欧における極右政党の主流化に関する比較分析」『年報政治学 成熟社会の民主政治』二〇一九 (二)、二三—三三頁。
- 譚天 (2020) 「与党としての急進右翼ポピュリスト政党は「政府の質」に如何なる影響を与えるか—西欧の事例を中心として」『公共研究』一六 (一)、一三七—二八六頁。
- 畑山敏夫 (2017—2019) 「マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム—変容するフランス政治と「国民戦線」(FN)」に於て考える (一—11) 『佐賀大学経済論集』五〇 (三)—五一 (四)。
- 水島治郎編 (2020) 『ポピュリズムという挑戦—岐路に立つ現代デモクラシー』岩波書店。
- 山口定 (2014) 『ファシズム (新版)』岩波書店。

- (1) 本書で議論されたのは「広義的」な急進右翼であり、「フアー・ライト」(Far-Right)／「極右」(Extreme Right)／急進右翼、「急進右翼ポピュリズム」(Radical-Right Populism)／オルタナ右翼といふ。下位類型が厳密に区別されていない。
- (2) 戦前の「保守革命」から現在に至るまでのドイツの急進右翼思想家を中心に紹介した Weib (2017) の日本語訳が最近刊行された。詳しくは長谷川 (二〇一九) を参照されたい。また、「近代主義と近代性」(Modernism and Modernity) という主題をめぐって二〇世紀から二一世紀にかけての欧州における五人の重要な急進右翼思想家を取り上げた近年の研究は、Gibson (2016) による。
- (3) 党首マリヌ・ルペン (Marine Le Pen) の「脱悪魔化」(Deiabolisation) 路線の一環として、二〇一八年六月一日に国民戦線は党名を「国民連合」(Rassemblement National) に変更した。マリヌ・ルペンの下での国民戦線の変容を詳述した日本語論考について、畑山 (二〇一七―二〇一九) を参照されたい。
- (4) メグレは国民戦線の発展の歴史における鍵の人物であり、副党首の座に就いていた彼は国民戦線の党思想の体系化と社会的受容性の向上に多大な貢献をした。しかも、まさに彼のおかげで、国民戦線は緩やかな政治団体から、主流政党に匹敵できるような完備性のあるかつ強固な組織構造を持つ現代政党へと変身した (古賀二〇一三; Mayer 2018: 620-621)。
- (5) イタリア「新右翼」(Nuova Destra) の重要人物であるタルキは、青年時代にイタリア社会運動の「前途有望な活動家」であると見られた (Gallagher 2000: 76)。その後、彼はイタリア社会運動を離脱し、一九八七年にフィレンツェ大学で博士号(政治学)を取得した。現在、彼はフィレンツェ大学政治学部の教授であり、イタリアにおける急進右翼・ポピュリズム研究の代表的な学者でもある。
- (6) ドイツ「新右翼」(Neue Rechte) の重要人物と文筆家である。また、社会学者、歴史学者として南デンマーク大学、そしてロベンハーゲン大学で教鞭を執ったことがある (Weib 2017-2019: 36-47)。
- (7) 急進右翼政党間の分断と連携、それに「国際化」(Internationalization) の過程と歴史を詳考した最新の文献として、Calani (2018) や McDonnell & Werner (2019) を参照されたい。
- (8) ポスト・コン連時代のロシアにおけるネオ・ユーラシア主義と急進右翼勢力の発展、ドゥーギン、そしてプーチン政権と欧

州の急進右翼政党との接触を紹介した文献について、Kreko (2014) および Umland (2017) を参照されたい。

(9) 冷戦を背景に発展してきた「第三の位置」は、西側陣営の資本主義と東側陣営の共産主義の両方に反対し、左右を超越して急進右翼的な文化観と急進左翼的な経済観を融合させようとする「習合主義的」(syncretic)な政治的立場である。こういう立場の代表的な例の一つは、自由主義、マルクス主義、ファシズムに次ぐ「第四の政治理論」とも呼ばれる民族ボルシェヴィズムである。

(10) 一九九一年に地域主義政党として発足した北部同盟は近年、国民政党化に努め、二〇一八年総選挙前には党名を「同盟」(Lega)に変更した。

(11) ユーラピアとは、アラブ世界と西欧(特にフランス)のエリート間の共謀によるイスラム化した欧州である。この陰謀論は既に一九七〇年代に出現し、二〇〇〇年代以降にイエオールの本(Ye-Ol 2005)によって広まったとされている。

(12) 北欧の最大の国民社会主義的な過激派組織である北欧レジスタンス運動は、二一世紀におけるネオ・ナチズムの国際的協力の中、一定の成功を収めた僅少な例の一つ(Mundt 2019: 64-68)であり、デンマーク、フィンランド、アイスランド、ノルウェーならびにスウェーデンの五カ国に支部を置いている。

(13) 急進右翼サブカルチャーと言えば、一般的に「スキンヘッド」が連想されるかもしれない。特に二〇〇〇年代以前の北欧の場合、「ホワイト・パワー・スキンヘッド主義」と、これに伴う「ヘイト・バンド」は非常に有名である。本章(第一章)の著者ベンジャミン・タイテルバウム(Benjamin Teitelbaum)によれば、フリーペリのメタポリティクス戦略が北欧諸国の急進右翼サブカルチャーをより「知性的」で「規律正しい」方向に転換させることに成功した結果、従来のスキンヘッド・サブカルチャーは基本的に消滅したという。北欧諸国の急進右翼サブカルチャー、とりわけ白人至上主義的な音楽がスウェーデン民主党の台頭への影響について、Teitelbaum (2017)を参照されたい。

(14) 欧州の急進左翼政党の平均得票率は一九四〇年代の二二・六%から二〇一〇年代の七・二%(March 2016: 28-29)まで低下の一途をたどりつつある一方、緑の党は近年、いくつかの国(特にドイツ)で急成長しつつある。とは言え、欧州全体から見れば、その平均得票率は一九七〇年代末の二・一%から二〇〇〇年代初頭の六・一%へと上昇してきたが、急進右翼政党と比較すれば増幅が小さく(Spoon 2015: 41)。

(15) すなわち、オーストリア、ベルギー、ブルガリア、クロアチア、チェコ、デンマーク、エストニア、フィンランド、フランス、ドイツ、ギリシャ、ハンガリー、イタリア、ラトビア、リトアニア、ルクセンブルク、オランダ、ノルウェー、ポランド、ポルトガル、ルーマニア、ロシア、スロバキア、スロヴェニア、スペイン、スウェーデン、スイス、イギリスの二八カ国である。

(16) 急進右翼／極右政党が関与した件数とは、ある急進右翼／極右政党もしくはその青年組織に明確に所属するテロリストによるテロ事件の件数ということである。一方、ネオ・ナチズム、ネオ・ファシズムまたはスキンヘッドの性質を帯びる緩やかな政治団体に所属するテロリストによるテロ事件はこのカテゴリーに含まれない。計算対象となる二二の急進右翼／極右政党は以下の通り―(一)デンマーク・デンマーク国民社会主義運動(DNSB)、(二)フランス・国民戦線(FN)、(三)ドイツ・ドイツ民族同盟(DVU)、共和党(BEP)、ドイツ国民民主党(NPD)、右翼党(DR)、(四)ギリシャ・黄金の夜明け(XA)、(五)イタリア・北部同盟(LN)、新しき力(FN)、社会運動・三色の炎(MS-FI)、カーサパウンド・イタリヤ(CPD)、(六)オランダ・中央党86(CP86)、(七)ノルウェー・国民同盟(NA)、ヴァーグリーズ(Vigd)、(八)スウェーデン・スウェーデン民主党(SD)、スウェーデン・レジスタンス運動(SM)、国民民主党(ND)、スウェーデン人党(SVP)、スウェーデン党(SVP)、(九)イギリス・国民戦線(NF)、イギリス国民党(BNP)、ブリテン・ファースト(BP)。例えば、ゴットフリート、テイラーとフリーベリが自らの章を担当する執筆者との書面交流あるいはインタビューを受けた。その中、フリーベリは彼自身が紹介される第二章の著者タイテルバウムの親友でもある。

(18) 王党主義・ナショナリズム団体「アクション・フランセーズ」(Action Française)の創設者と理論家、フランスにおける反近代主義の代表的存在である。

(19) フランス人、「革命的サンディカリスム」(Revolutionary Syndicalism)の理論家、ファシズムに絶大な影響を与えてムッソリーニに「思想の導師」として尊敬されていた。

(20) ドイツ人、ユンガーと同じく保守革命の代表的な人物、「第三帝国」を命名し、ドイツのナショナリズムの高揚とナチ党の基本理念に深い影響を与えた。

(21) スイス人、保守革命という概念の創造者、その著作が「新右翼の世界観的正典」と思われる(Weis 2017:2019: 48)。

(22) テューリンゲン州党支部リーダーのビョルン・ハッケ(Björn Hocke) はドイツのための選択党内の最右翼派閥ごと「翼」(Der Flügel)の領袖である。当該派閥は二〇二〇年三月に「連邦憲法擁護党」(Bundesamt für Verfassungsschutz)によって「極右団体」と認定された結果、四月に解散させられた。

